

# たぐみ

T A K U M I

No.026

平成22年6月●夏号

## 信州名匠会

(題字：故 池田三四郎 前名誉会長)

## 歴史の香る建築物に思いを馳せて 信州名匠会研修旅行「福井県の建築をたずねて」

信州名匠会の平成21年の研修旅行は、11月7・8日に32名が参加して行われた。今回は、主に福井県の歴史的な建築物や景色などを見学した。信州より東海、越前、北陸と本州をぐるりと巡るルートで、歴史的建築物に当時の生活や景色などへ思いを馳せる2日間であった。



一乗谷朝倉氏遺跡にて

### 戦国時代の面影を色濃く遺す一乗谷朝倉氏遺跡



一乗谷朝倉氏遺跡の説明を熱心に聞く参加者

今から約500年前、福井県一乗谷には、戦国大名朝倉氏が五代103年にわたり越前の国を支配した城下町があった。北陸の小京都とも呼ばれ繁栄したこの町もまた、戦国時代という波にのまれ、朝倉氏が信長に敗れると共に灰燼<sup>かいじん</sup>に帰した。

土に埋もれた町は、昭和42年より本格的な発掘調査が開始され、約400年ぶりに日の目を見る。当主の館・武家屋敷・寺院・町屋・職人屋敷から道路に至るまで、町並みがほぼ完全な姿で発掘された。町並みの一部は忠実に復元され、発掘された石垣や礎石はそのまま使い、建物内部も出土品に基づいて再現され、当時の雰囲気味わうことができる。また、発掘された状態で町並みを展示している区画もあり、出土品は資料館にて展示されている。

いずれも歴史的に貴重な資料であり、昭和46年には一乗谷城を含む谷一帯278haもの広大な敷地が国の特別史跡に指定され、平成3年には庭園が特別名勝に、平成19年には出土品が重要文化財に指定され、全国で5例目となる国の三重指定された遺跡である。

(交流委員会 西澤嘉雄 (N設計))

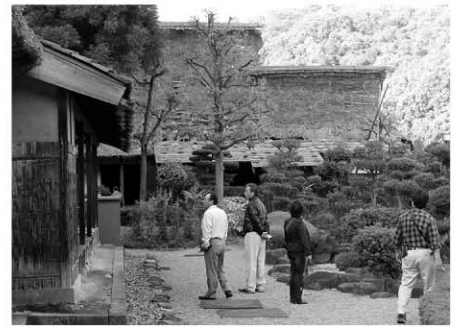


中津川市担当者より蛭子座の説明を受ける  
(円柱には蛭川石が使用されている)

# 研修旅行スナツプ



江戸時代中期を代表する名園 養浩館庭園



おさご民家園（茅葺き民家が多数保存されている）



改修工事の木部洗いに携わった安岡氏の説明で永平寺見学



丸岡城天守閣（屋根瓦は地場産の石が使われている）

## 研修旅行日程

11月7日（土）長野市－蛭川公民館「蛭子座」－日本海さかな街－福井市おさごえ民家園－名勝養浩館庭園－福井県立美術館－ホテル（泊）

11月8日（日）ホテル－乗谷朝倉氏遺跡－永平寺－東尋坊－石川県九谷焼美術館－長野市

## 平成21年度研修旅行「福井県の建築を訪ねて」参加者名簿（33名。氏名・所属、敬称略）

井内猛男・井内工務店、伊藤章・アキプランニング、犬飼栄治・シナノ大理石、荻原弘司・本久、久保敏幸・さつき苑、坂田守夫・坂田工業、水本盾夫・前田製作所、新井啓明・ブルーライン、上野裕司・上野眞由美・一善、赤嶺智教・長野赤十字病院、白石大陸・サンコー特機、高木茂実・松田・南信、竹内公夫・ビホームテクノクリエート、中沢智・中沢康敏・中沢建具店、西宮登喜男・綿内瓦工業、藤田勇・藤田建築、増田幸雄・匠建設、宮原 博一・五明、吉田雅彦・スタジオ・スペースツー、鈴木隆・ルームデザインハウス、山田一忠・インテリア販売ヤマダ、内山保・朝陽工芸、鳥羽英夫・長野サウナ販売、小川明・建築工房空、石田喜章・石田組、轟光洋・轟左官、吉田広子・スナック紋、西澤嘉雄・西澤重門・西澤哲也・エヌ設計、西澤広智・事務局・宮本忠長建築設計事務所

## 会員の動向（平成21年7月以降平成22年6月現在。敬称略）

■入会：石田喜章・石田組・建築大工・諏訪市大字四賀792／轟光洋・轟左官・左官・千曲市大字八幡3725

■賛助会員 担当者の変更：I N A X長野営業所・衛生陶器・タイル：前任・平林幹久 新任・細川 和哉

■退会：個人会員／望月 好一 インテック左右田・畳・内装業・長野市南長池351

会員にきく  
「たくみの仕事」Vol.17

# 人間的な原点を大切に 職人の育成を

株式会社井内工務店（大田市） 代表取締役 井内猛男氏

profile●昭和29年（1954）生まれ、56歳。大田市出身。大学を卒業し、大手ゼネコンで勤務した後、平成6年に井内工務店に入社した。父、八雄氏の後を継ぎ、16年に代表取締役に就任、現在に至る。当会の副会長を務める。妻と長男、長女の4人暮らし。



本社長室にて（撮影 吉田雅彦。3点とも）

ゼネコンでは、主に現場を担当。16年間務めた会社を後にして、大田市に戻ったのは平成6年。バブル経済は崩壊していたが、長野では平成8年の冬季五輪を前に、まだまだ公共投資が盛んだった。「これはまずいと感じた。東京も札幌も、五輪後の業界の衰退が著しかったから」。売上は当時20億円ほど。東京では躯体業者が潰れていく様子を目の当たりにした。「うちはそういう風になっちゃいけない」。家業へのそんな心配が、帰郷を決意させた。

先代社長で父の八雄さんは仕事熱心で有名。昭和56年に完成した長野市立博物館は、当時でも例がない特殊型枠（出目地の丸柱等）を使用したコンクリートの打放しで、設計を担当した宮本忠長建築設計事務所が「型枠は井内さんに」と



本社長室にて社長室に掲げた父・八雄氏の写真。

依頼し、八雄さんが快諾して工事が進んだ。八雄さんのような気骨のある職人を大切にしようとの宮本会長や村松貞次郎初代会長らの思いが信州名匠会の立ち上げにつながったという。創設時から、副会長を務めた八雄さんの遺志を継いで、猛男さんも今、副会長を務める。

「本当はこんな立場ではない。皆さんに温かくしてもらってやっている」と謙遜するが、井内さんへの会員の信頼は厚い。技術者が多い名匠会の中で、全体を見渡しながら現場を動かす視点は、ゼネコン時代から鍛えてきたセンスが生きている。

「売上は大事だが、専門業者はやっぱり良いものをつくること」。そう話す井内さんの悩みは業界全体に及ぶ。職人の技術の衰退を嘆く一方、「現場は職人さんが一番良く知っている。段取りよく工事を進め、良い仕事を残すためにも、

工事を統括する現場代理人は、職人との親密な関係を築いた上での、日々の密なコミュニケーションが欠かせない」と語る。「“同じ釜の飯”はないが、人間的な原点に戻らなくては」。そう切実に語った。（栗原直良）



雄大な山岳を背景に、資材置場・加工場で打ち合わせをする。

会員にきく  
「たくみの仕事」Vol.18

## 名匠会の顔 防水工事65年

坂田工業株式会社（長野市） 代表取締役 坂田守夫氏

profile●昭和19年(1944)生まれ、65歳。群馬県高崎市出身。趣味は食べ歩き。奈良漬をはじめ各種の漬物、薬酒漬など、インタビューの際もグルメ情報が盛りたくさん。「動いていると面白い。計画しないで行くのが良い」。



本社長室にて（撮影 吉田雅彦）

坂田工業は、守夫さんの祖父が昭和5年に長野市で瓦屋として創業。その長男（守夫さんの伯父）が高崎市で事業を展開していた。当時、宮崎県庁に土木技師として務めていた守夫さんの父は、兄を助けるために家業を継ぐ。守夫さんは弟妹とともに高崎市で生まれ、昭和24年、5歳のときに長野に戻ってきた。

坂田工業は、30年代になると防水工事だけを手がけるようになり、県や市の仕事を中心に官庁物件で実績を伸ばした。40年代には国関係の工事も請けるようになった。

守夫さんの入社は昭和42年。世間は建築ブームのまっただ中。学校関係から庁舎施設まで、官庁の建築工事にはすべて、防水工事が含まれていた。

48年2月、社長に就任して間もなく、第一次オイルショックに見舞われた。防水業界にとっても死活問題で、新規メーカーが出てきて合成ゴムシートや塩ビシートなど、新しい製品を発売した。押さえコンクリートなしで歩行出来る塩ビシートは人気を集め、役所も積極的に使った。

アスファルト防水なら30年以上は持つが、塩ビシートは3、4年でダメになる。施工が手軽なため防水工事業以外の職種（内装）からも塩ビシート防水に乗り出したため、技術を伴わない工事が少なくなかったという。「あれは失敗だった」と振り返る。（坂田工業では社内での検討を重ね、暴露試験を行

った結果、寒冷地では無理と結論を出し、施工は一切しなかった）

屋上部分に緑化や外断熱、太陽光発電などの設置需要が高まるにつれ、防水工事の必要性は今以上に高まることが見込まれる。需要に応えるため、後進の育成も欠かさない。現場に出ている社員は8人、防水関係の1級技能資格所有者は延べ13人。同社専属の1級技能資格者は延べ34人。さらに登録基幹技能者が1人、防水施工管理技術者2人、1級建築士1人、1級建築施工管理技士1人がいる。腕に技を身に付けようと「若い人も入ってきている」という。

信州名匠会には発足時から参画し、現在、専務理事を務める。会への思いは人一倍強い。名匠会のあり方について「もっと個人会員が積極的になってほしい」と語る。「<sup>ひがかり</sup>倅が頑張っているところもある。そういう若い人を中心に青年部をつくったら良い。後に続くように布石を打っていききたい」。（栗田直良）



善光寺山門工事現場見学研修会で名匠会員にあいさつする（右から2人目）



# 定例研修会●Report

(平成21年12月～平成22年4月)

## 平成21年度 第5回研修会 【太陽光発電に関する勉強会】

平成21年12月27日(日)

講師：樋口 豊氏(ライフエンジニアリング、当会監事)  
橋 信司氏(ナガサカ電気 部長)・田村賢二氏(三菱重工空調システム 部長)

参加者：21名

### 【太陽光発電の基礎知識と補助制度を学ぶ】



環境問題への関心の高まりから、近年脚光を浴びる太陽光発電。12月の研修会では本会監事の樋口氏に講師を務めていただき、太陽光発電の基礎知識、高橋氏に太陽光発電の補助制度について教えていただいた。田村氏からは、太陽光発電の費用対効果や発電量について、詳しい説明を受けた。参加者の関心が高く、多くの質疑応答がなされた。積雪地域では太陽光パネルの設置にいくつかの注意点があることも学んだ。今後、普及が見込まれる分野だけに、太陽光パネルと屋根との意匠的な一体性をもった製品開発を望む声が聞かれた。

環境問題への関心の高まりから、近年脚光を浴びる太陽光発電。12月の研修会では本会監事の樋口氏に講師を務めていただき、太陽光発電の基礎知識、高橋氏に太陽光発電の補助制度について教えていただいた。田村氏からは、太陽光発電の費用対効果や発電量について、詳しい説明を受けた。参加者の関心が高く、多くの質疑応答がなされた。積雪地域では太陽光パネルの設置にいくつかの注意点があることも学んだ。今後、普及が見込まれる分野だけに、太陽光パネルと屋根との意匠的な一体性をもった製品開発を望む声が聞かれた。

## 平成21年度 【新年会】

平成22年1月20日(水)  
ホテルJALシティー長野  
「四川楼」にて  
参加者 36名

### 【村越先生、西澤さんに“福”を賜った年始め】

会員同士の親睦を図り、一年の抱負を語り合う信州名匠会新年会が、例年にならって開催された。降旗副会長の年頭のあいさつで始まり、村越先生から縁起物の「上州高崎福だるま」と西澤嘉雄氏から武水別神社八幡宮の福御守をいただいた。厳しい社会情勢の年、匠の知恵で前向きに仕事に臨むことを共に確かめ合った。

新会員の石田喜章氏(大工)、轟光洋氏(左官)両氏から自己紹介と入会の思いを語っていただいた。21年度第4回研修会で茶の作法について学んだことをきっかけに、茶道具にも関心をもつていただこうと村越先生に用意していただいた先生の茶碗を鑑賞しながら、会員同士の懇親を深めた。

## 平成21年度 第6回研修会 【民家構造模型と工法の解説】

平成22年2月24日(水)

講師：宮澤 郁夫氏(宮澤建築、当会理事・技術委員会)  
参加者：23名

### 【伝承されるべき技術と想い】

2月24日の研修会は、「民家構造模型と工法の説明」と題し、大工棟梁・宮澤郁夫氏に、パリに移築した開田村の民家の1/4模型の一部を見ながら、その工法説明を中心とした講義をしていただいた。平成19年8月に同氏によって行われた「パリ移築再生の報告講演」に引き続くものである。

模型は、県が行った「地域ものづくり人材育成支援事業」に則って制作された。継手や仕口の細部にわたって忠実に再現され、解体・組立が可能である。足固めや地貫といった床組みの構造部材は、略鎌(鯖口)込栓と楔メ。また小屋を支える丸太梁は、鬚太延ばしの杢差しを鼻栓または込栓で固定している。外部壁板は殺ぎ継ぎ、破風は引き独鈷、そして棟木に取り付く垂木ですら蟻落して納められており、シンプルなその納まりは、英知が積み重ねられた手間隙を惜しまない手仕事ばかりである。

講演を通じて、先人たちの優れた技術と誠実な想いを知り、伝承されるべきものの必需性やその担い手を育成する重要性を共感するとともに、そこに共存する実社会のジレンマにも参加者が思い思いの言葉を交わした。

「こうした伝統的要素をもつ工法の建物は法的に分けて考えるべきではないか」と、宮澤氏は講演を結び、手仕事の喜びを知る名匠会員にとって、課題も投げかけられた有意義な時間となった。(当会会員・建築工房アカシヤ・大工棟梁・堀誠)



伝統技術の粋を集めた宮澤氏の1/4模型

参加者にあいさつする宮本会長



## 平成21年度 第7回研修会 【「桐箱職人 伝統の技」 DVD製作発表】

平成22年3月17日(水)

小布施町立図書館「まちとしょテラス」多目的室

講師：山中 袈裟嗣氏(山中桐箱店、当会会員)

花井 裕一郎氏(同館館長、映像作家)

参加者：25名

### 「伝統の技を映像で保存し継承する試み」

50年にわたって桐箱づくりを手がけてきた山中袈裟嗣氏。その功績が認められ、昨年、(財)税理士共栄会文化財団の地域文化助成金に選ばれた。山中氏の手仕事を映像に残して後世に伝えようと、助成金の一部を使った記録DVDが完成し、披露された。

取材と編集に当たった小布施町立図書館長で映像作家の花井氏によると、取材は昨年10月に開始し、作業場に何度も足を運んで膨大な量の記録映像を撮りためた。撮影は「場所の音」にこだわったという。音から感じられるものを大切にしようと、BGMは最初と最後にだけ挿入した。映像を補足する解説は山中さん自身の声だけ。ナレーションは用いなかった。

鋸を引く音や鉋をかける音、金槌を叩く音が響く。単調でも正確に反復されるそれら道具が刻むリズムと、山中さんの真剣な表情が職人の技の一瞬一瞬を映し出す。時には山中さんの息づかいすら聞こえる。

段取り(木取り)に始まり、厚さを決め、水をつけた砥粉を引き、一つ一つの材料を整える。そして箱の深さや幅を決める。「設計図は頭の中」と山中さん。45度や90度の角度をピタリと決めることのできる小口板や、それに合わせて使う小口鉋。「昔は桐下駄屋さんが使っていました。今では我々も使うようになりました」。製作過程の合間合間に、山中さんの身体の一部と化した道具も紹介される。50年の長きにわたって習得した「手際」が、これらの道具たちに息を吹き込んでいる様子が伝わってくる。

蓋が閉まる部分は、本体の箱に薄い板を貼ってつくる「貼り印籠」が今は主流だという。しかし、「うちは、これ」と、一枚の板を削って仕上げる「本印籠」が父から受け継いだ伝統の技だ。「2枚削るよりも1枚の方が早い。貼る手間もない。薄い板は削れば波を打つ」。伝統の技は合理的でもある。

「(固定定規を使えば)同じものを何百何千と作ってたって同じ寸法。だから蓋はどれでも入る」「(板の中心に糊が溜まる溝を付けると)後で湿気ると多少増えてくるから板と板がぴたりと付くんです」。先人の工夫についての何気ない説明も、ともするとそれが山中さんの日々の研さんに裏打ちされていることを忘れそうなほど簡単に聞こえる。「昔の人はえ

らいことを考えたものです」。

段取りが終わり、いよいよ箱を組み立てていく。作業は段取りに比べて思いの外、呆気ない。蓋を閉めると最初は渋く、徐々に適度な厚さにまで削っていく。

箱の格好ができて上がる。仕上げに引く鉋くすの薄さが仕事の繊細さを物語っている。一旦、蓋を閉め、逆の方向に回してもう一度閉める。どちらの方向もピタリと閉まる。木目はほとんど区別がつかない。ひもを通して縛り終えると完成だ。

職人の技を習得するには何年もかかる。「仕事は盗んで覚える」と言われるのは、手先の微妙な感覚がマニュアルでは表しづらいからだ。今後、こうした職人の技を映像記録化(デジタルアーカイブ化)していくことで技術が保存継承されていく意義は大きく、そのさらなる活用が期待される。



ご自身の仕事を記録した映像を参加者に解説する山中氏

## 平成21年度 【理事会】

平成22年4月13日(火)

宮本忠長建築設計事務所にて

出席者 理事11名

事務局2名、オブザーバー1名

## 平成21年度第8回研修会 「雪しろ窯 陶芸教室」

平成22年4月17日(土)

講師：村越久子氏(上田市武石、雪しろ窯主宰、  
信州名匠会顧問)

参加者：26名

### 「ものづくり、陶芸の楽しさ満喫」

季節はずれの雪が止み、晴れ渡った青空の下、会員の家族や仲間大勢が集合。雪と桜のめったに見られない景色を楽しんだ後、自己紹介を交えながら和気あいあい、村越先生が用意してくださった昼食をいただいた。

事前に構想を練ってきて、淡々と制作に取り掛かる常連の参加者、参考の作品を見ながら村越先生とスタッフの皆さんに教わりながら手探りで作り始める初めての参加者。それぞれ無心にもものづくりの楽しさを感じながら2時間ほどで、個性的な作品の形ができあがった。この後2ヶ月かけて乾燥、色付け、焼きをしていただき、完成した作品が総会の会場に



展示される。参加者はどんな作品に焼きあがるか楽しみにしている。

雪しろ窯の暖かなお部屋で村越氏(中央)の手ほどきをいただきながら、思い思いの作品を仕上げる参加者たち